【論　文　提　出　者】　社会文化科学研究科　文化学専攻　文化資源論講座　無形文化資源論分野
歐　薇蘋

【論　　文　　題　　目】　「楊逵研究——植民地時代における楊逵の「転向」を中心に——」

【授与する学位の種類】　博士（文学）

【論文審査の結果の要旨】

歐薇蘋氏の論文「楊逵研究——植民地時代における楊逵の「転向」を中心に——」は、日本植民地下の台湾において日本語で創作活動をおこなっていた楊逵を取り上げ、プロレタリア作家から「皇民作家」に転向したとする楊逵評価の是非を明らかにしようとした意欲作である。

第一章では、楊逵が生きた植民地時代の台湾の社会状況と楊逵の文学観の変遷を先行研究に基づいて整理し、問題の所在がどこなのかを示している。

第二章では、二〇年代に発表した処女作の「自由労働者の生活断面」と「新聞配達夫」の二作を比較検討し、日本滞在中にプロレタリア文学運動の強い影響を受けて創作活動を開始した楊逵ではあったが、台湾に戻り農民運動や文化的啓蒙運動に深く関わっていく中で、日本のプロレタリア文学と同じような「資産階級」対「無産階級」という単純な図式では、台湾の現実が描けないことを認識し始めていたことを明らかにしている。

第三章で取り上げた「田園小景」（１９３６年）は、台湾における研究でもしばしば言及されている作品であるが、台湾において論じられる場合、楊逵が戦後「模範村」と改題し、反植民地的な意識を鮮明に表した文章に依拠して論じられているのに対して、歐氏はあくまでも初刊のテキストにこだわり、当時の楊逵の実相を明らかにしようとしている。その結果、戦前に発表された原稿からも、階級意識と民族意識がないまぜになった楊逵の姿を浮かび上がらせることに成功している。

第四章は、「鶯鳥の嫁入り」「無医村」「泥人形」という四十年代前半に発表された三作品を取り上げ、表面的には「大東亜共栄圏」の存在を肯定しているがごとき姿勢を示しつつも、注意深く作品を読めば、当時のスローガンである「共存共栄」が単なる美辞麗句に過ぎないことを暴露しているのだと論じている。

第五章が扱う「増産の蔭に」は、台湾総督府情報課の委嘱で書かれた作品であり、楊逵を「皇民作家」であったと断定する有力な根拠となっている。歐氏は、楊逵が官憲に対して「転向」の意思を示し、「皇民作家」となったことを認めつつも、台湾社会の現実を正面から批判することができない状況の中に置かれた楊逵はあくまでも台湾の読者を励まし、心ある人々に台湾の実情の一端を伝える表現者としてあり続けようと、敢えて時局順応の姿勢を取ったのではないかと推断している。

最後に歐氏は、各章を踏まえたうえで、楊逵の「転向」は、真の転向ではなく、漢民族としての民族意識ではなく、台湾人としての民族意識を深く胸の奥に秘めて、台湾農民の代弁者たることを目指したのだと結論づけている。

先行研究への目配りは抜かりなくおこなっているが、逆にそれが裏目に出て先行研究に縛られた控えめな判断が散見するのが、本論文の最大の弱点である。しかしながら、植民地体制下に生きた楊逵の創作意図を、初出テキストに依拠して出来る限り丁寧に解読していこうとした本論文の手堅い論証は評価に値する。回りくどい表現がまま見られるものの、日本語の行文も完成度は高く、学位論文としての水準は十分に超えていると判定できる。

【最終試験の結果の要旨】

審査委員会は、平成２２年１月１５日（金）午後２時から３時まで、文法棟小会議室において、歐薇蘋氏に対する口述試験を実施した。まず、論文執筆の意図、論文の意義、論文全体の概略などについて当人から説明があり、ついで審査委員から論文の内容についての質問等がおこなわれた。論文に示されている歐氏の判断や、歐氏の論文の独創性等について質問が提示されたのに対し、歐氏は論文の内容に即して具体的に回答した。

さらに、平成２２年１月２３日（土）、文法棟Ａ－２教室で開催された学位論文公開発表会において、歐氏は自らの学位論文について発表したのち、出席者と質疑応答をおこない、専門領域について優れた学識を有していることを示した。

以上のことから、本審査委員会は、歐薇蘋氏は自らが専門とする研究領域について、豊かな学識を有し自立して研究を行う能力が十分にあると判断し、博士（文学）の学位を授与するに値すると判定した。

【審査委員会】
主査　吉川　榮一
委員　森　正人
委員　坂元　昌樹
委員　千島　英一
委員　木下　尚子